

海外プログラムを当てはめると

CASE 02 | 日米交流・First Step Camp 越境型ハッと育プログラム

出発点

海外を見るだけでは、
気づきは行動に変わりにくい

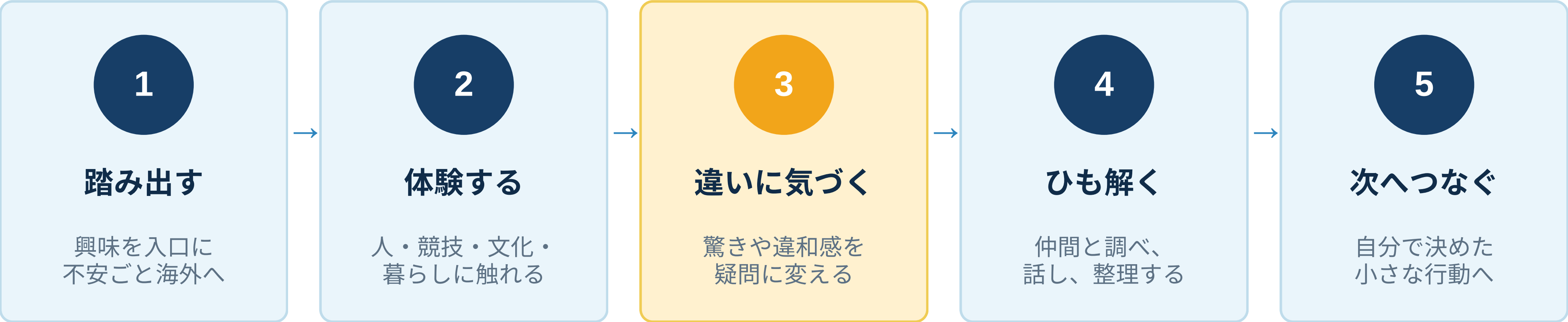
技術を学ぶだけでなく、文化・教育・暮らしの違いを
自分の問いとして持ち帰る必要がありました。

目指した景色

自分軸を造るお手伝い

日米の違いから自分を知り、
興味を次の一歩へ変えられる人へ

ハッと育の進め方として整理すると



「教えない」は、本人の中に答えが生まれる余白を残すため。

アメリカの方法を正解として渡さず、体験と比較、問い、対話の時間を用意する。
一人ひとりが違う答えを見つけ、自分の意思で動き出せる環境を設計しました。

この事例に見える「3回の受容」

- 受容① 一歩を踏み出す前の不安も受け止める
- 受容② 感じ方の違いを、正解・不正解で裁かない
- 受容③ 帰国後に本人が決めた小さな実践を見守る

6つの体験を、気づきの仕掛けとして見る

異文化との違いを、驚きで終わらせず、自分の問いへ変える構成です。

1

米国コーチのクリニック

仕掛け

指導法、声かけ、練習構成を身体で体験する。

気づき

試合を想定した練習や、判断を褒める指導の意味に気づく。

日米比較

空手（型・帯）

2

試合・大学・施設見学

仕掛け

同年代の試合、大学、高校、プロの環境を見る。

気づき

現在地と格上の基準を知り、自分に必要な練習を考える。

表裏一体

心のともし火

3

日系人の歴史と交流

仕掛け

文化会館、領事館、商工会で人と歴史に触れる。

気づき

日本人としての誇りと、多様な背景を尊重する意味を知る。

繋がる

日米比較

4

暮らし・英語・買い物

仕掛け

日本にもある店や日常を、アメリカ側から観察する。

気づき

身近な違いから疑問が生まれ、調べる入口が増える。

リッツ・カールトン

心のともし火

5

グループワーク

仕掛け

感じた違いを持ち寄り、調べ、話し、発表する。

気づき

他者の視点を受け入れながら、自分たちの答えをつくる。

インディアンの教え

脳（機能理解）

6

共同生活と役割

仕掛け

部屋、食事、移動などを分担し、自分たちで動く。

気づき

安心と安全を守りながら、責任と助け合いを経験する。

合気道

繋がる

旅が終わった後に、自走が始まった

体験の直後に答えを求めず、比較と対話を通じて、本人の行動へつなげます。

体験を行動へ変える時間軸



気づきは即効性のある成果ではなく、本人が決めた行動の積み重ねによって自分軸へ育ちます。

帰国後に確認された変化

事例① 自分で学び方を決め、続けた

帰国後のテストで学年2位を記録し、その後も5位以内を維持。本人が目標、学ぶ場所、開始時期を決め、計画して実践する習慣が育った。

事例② 留学目標が、日々の習慣へ

疑問に思ったことを調べ、計画を立てて行動。勉強と練習を習慣化し、本人・コーチの記録では3ポイント成功率が40～50%から約80%へ。

持ち帰ったのは、アメリカの答えではなく、自分で問い、決め、続ける習慣。

コーチは結果を急がず、本人が自分の歩幅で自分軸を育てる過程を見守ります。

自走するプログラム

体験後も、本人の中に残った問いと目標が、次の行動を動かし続ける仕組み。

約20年で、参加者が次の機会をつくる側へ

個人の成長で終わらず、育った人が次の選手・チーム・地域を支える循環が生まれています。

期間

2005年から約20年

シアトル・ポートランドを中心に交流を継続

参加

延べ約1,000名

プロ・アマ選手、指導者、ジュニアが参加

進路

多様な役割へ

留学、選手、通訳、スタッフ、指導者、経営

循環

次の機会をつくる

かつての参加者が、次世代を支える側へ

5 VALUESで振り返る

尊重

感じ方と進む道を尊重

創造

違いから自分の答えをつくる

成長

気づきを習慣へ変える

自由

興味から次の一步を選ぶ

平等

肩書きを越えて機会と交流をつなぐ

1 IDEAL | 平和

国や文化の違いを優劣にせず、互いの良さを学び合える関係へ

すでに残っている検証材料

参加者の気づき

帰国後の変化

留学・支援の循環

指導・運営への展開

今後加える資料

年度別参加人数
参加前後アンケート
帰国後の行動継続
卒業生インタビュー